

教員活動状況報告書

提出日：2023 年 3 月 3 日

所 属：獣医 学部 獣医学科

氏 名：新井佐知子 職位： 講師

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

【豚をスキな学生を増やしたい。】

当大学の学生は将来的に小動物獣医師を目指している者が多く、未だ産業動物獣医師への理解（特に養豚関係）や職業的な意義、やりがいなどが浸透していないと感じていることから、授業や実習を通して産業動物獣医師についての理解を深め、学生に産業動物と産業動物獣医師への興味を持ってもらい、優秀な産業動物獣医師を育成することを着任当初からの教育目標としている。

産業動物基礎実習（1V・選択）：産業動物そのものに興味を持たせる目的の実習である。普段触れることの無い牛や豚を実際に触りその生体について学びながら、診療や手術の見学を通して産業動物への興味を持たせる目的の選択実習である。毎年大変好評で、選択科目にもかかわらずほぼ学生全員が参加している。

畜産管理学（3V・選択）：気軽に訪れることができない養豚場の様子や獣医師の巡回指導についてスライド（もしくは動画等）を通して学び、養豚獣医師の仕事内容や、豚という動物の管理の難しさや面白さを伝える選択科目である。

獣医内科学（4V・必修）：主に動物としての豚に焦点を当て、疾病診断や臨床症状、豚特有の飼育方法の要点について学んでもらう目的の必修科目である。意外と「豚は面白い」と思ってもらえる教科。

獣医総合臨床実習（5V・必修）：産業動物獣医師として基本的な豚の扱い（主に保定や採血、注射法など）を学生に学習してもらう目的の必修科目である。

産業動物臨床実習（5V・必修）：今までの授業や実習での知識をもとに実際に疾病診断や検査などを考え、時に治療や解剖を行って豚の疾患について総合的に学んでもらうことを目的として教育を行う。

科目名	学科・専攻	必,選,自	配当年次	受講者数
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1	145
畜産管理学	獣医学科	選択	3	156
獣医内科学	獣医学科	必修	4	138
基礎・産業動物総合臨床	獣医学科	必修	4	138
産業動物総合臨床	獣医学科	必修	5	146
獣医総合臨床実習	獣医学科	必修	5	146
産業動物臨床実習	獣医学科	必修	5	146
産業動物アドバンス実習	獣医学科	選択	6	5

2. 教育の理念（育てたい学生像、あり方、信念）

【優秀な産業動物獣医師を社会へ多く送り出し、日本の畜産業に貢献する】

2010年に宮崎県で発生した口蹄疫では牛と豚の殺処分のため全国から多くの獣医師が宮崎県に集結した。当時、私も豚の殺処分作業にあたったが、同じ殺処分のチームの中には豚の扱いが全く分からないと話すベテラン獣医師が多く見られた。このことから、「獣医師であっても、豚という動物は機会が無いと触ることすらしない」のだと感じた。

全国的な豚のコンサルテーション業務を行う獣医師たちの団体でもある日本養豚開業獣医師協会（JASV）からも、毎年のように、豚を扱える獣医師数の不足と採用に関する学生の要望の声が届いており、学内で牛や豚、馬を飼育し、実際に触れて実習ができるこの麻布大学の環境だからこそ、実践力のある産業動物獣医師の育成が可能なのではないかと感じている。

豚の基本的な扱いを授業や実習で学ぶことで、学生は将来の産業動物獣医師のビジョンをより明確にすることができ、進路の選択肢としてイメージすることが可能であると考えている。

また、2022年度より相原高校の豚生産クラスの学生と「酵母豚」の開発と生産に向けジェネプロ課題として研究を開始した。大学生は、高校生に研究する「背中」をみせることで責任感が増し、高校生は、身近で麻布大学生と触れあうことで進路選択の具体性が高まる。双方の良い部分が「豚」を通じて与えられることを感じている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

前述したが、麻布大学は学内に豚舎がある。学生は、触れたことの無い動物には興味を示さず、動物が好きだと自負する獣医学生ですら、最初は豚に対し恐怖心を抱く。しかし、1年生対象の産業動物臨床基礎実習では初心者でも比較的簡単に扱える子豚を用いて、実際に触れさせることで恐怖心を和らげ、まずは豚という動物に興味を持たせることで、豚に対する探究心を芽生えさせる。内科実習では全員に豚の採血や保定を体験させ、さらに授業では現場獣医師の仕事内容や衛生管理などの紹介をすることで、豚の獣医師の社会的

な貢献と役割を具体的に知ることができる。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

A

学生が興味を持ち、安全に実習ができるよう目を配らせた。

②学生の理解度の把握（A～C）

B

小テストやレポートなど。意外と授業や実習内容を把握していない学生がいる。

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

A

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

A

特に 1 年生の産業動物に興味を持った学生からの質問が多かった。高学年になると質問は減る傾向。

⑤双方向授業への工夫（A～C）

B

人数が多いのでそこまで確認が取れない

※A（十分実施している）B（実施しているが十分でない）C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

総合獣医学の授業があるときはまめにコミュニケーションを取り、勉学のチェックをしていた。総合獣医学修了後は友人とグループ学修しているようで、研究室では顔を見なくなった。

5. 学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

オムニバス授業の担当が多いので、あまり授業評価についてはコメントが書かれない。

②①の結果はどうでしたか。

特に不満もなさそうなので、前年通りとした。

③②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

前年どおりに行う予定

6. 学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

個人的には、ただ机に向かわせたりゼミに参加させても学修効果は無い気がする。「点」の学修ではなく、それぞれの科目の「紐付け」の強化が重要だと思う。

特に臨床系は、病気の話ばかりしても覚えられないので、例えば当研究室で豚を飼育した時はなぜ衛生管理に気を配らないといけないのか、飼料量はどのようにして決定するか、など、衛生学、栄養学、解剖学や生理学などと紐付けて教育する。生体を目の前にすると責任感が出て覚えるようになる。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

知識の紐付けが強化された学生は学習意欲が向上するが、学生の差が大きい（話したことを覚えられない、復習しようとしにくい、聞き流す、等）。

7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

できる限り出席している

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。（分量の目安：3～6行（120字～240字））

・産業動物（特に豚臨床）への就職希望学生を年間3人以上、出したい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

・シラバス及び学生評価（産業動物臨床基礎実習、畜産管理学、産業動物獣医総合臨床、獣医内科学実習、牧場実習、獣医内科学、産業動物臨床実習）